

山田太一

藍より青く

下



山田太一

藍より青く
下



山田太一（やまだ・たいち）

昭和9年，東京浅草に生れる。

早稲田大学卒業後，松竹大船撮影所演出部を経て，現在フリー・シナリオライター。

おもなシナリオに「パンとあこがれ」「3人家族」「二人の世界」「知らない同志」他，脚色に「女と刀」「俄」などがある。

藍より青く（下）

定価五〇〇円

昭和四十八年一月十日印刷
昭和四十八年一月二十日発行

著者 山田太一

発行者 山越 豊

印刷 三晃印刷

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一
電話（五六一）五九二一

振替東京三四

©一九七三 検印廃止

目次

はじめの一夜	5
街の家	29
走るひと	40
冷たい土地で	75
ちいさな唄	96
闇を歩いて	118
雨	136
再会	155
昭和二十八年 秋	174
夜に寄せて	196
寒い日に	213
春の誘い	236
遠い海	259
二十一年目の夏	284

				冬の潮	310
			死者の唄		337
			サイパン紀行		357
			ひとりではなく		370
		あとがき			375
題字	装幀				
町	野田				
春草	哲也				

藍
より
青
く

はじめの一夜

1

汽車の中で落日を見た。

あかあかとした太陽が執拗に汽車を追ひ、追いながら徐々に力をなくして山に沈むのを、真紀は目をなせずに見ていた。やがて夜が空をおおうことを、はぐれた小動物のように予感するのは、故郷では知らない感覚であった。

日田の駅をおりと、町は夕闇である。

同じ汽車でおりた人々の流れにおくれまいとして、真紀は歩調をゆるめずに、正面にのびた道を歩きはじめた。

リュックを背負い、風呂敷包みを提げた女のひとり旅が、ひとの目にどのようなうつるかがわかるような気がする。

そんな視線からのがれるように、ただ目の前の道を歩きはじめていた。とり残されたように、がらんとした駅前に立つことに怖れがあった。しかし、歩いていても、自分がたよりなく無防備だという気がした。

裸電球を店先にさげた洋品店の前で、肥満した五十男が、真紀を見送るのがわかった。

夕飯だと子供を呼びながら、女が一瞬口をとぎして、無遠慮に真紀を見つめる。

他所者よそものという目であった。いや、そんな気がしただけかもしれない。はじめておりた町に、島しか知らない真紀は、肩を固くして身構えていた。

すると、いきなり広い川へ出た。

予備知識では、三隈川である。川原はすでに闇に沈みかけ、水の流れだけを、残照がひえびえと光らせている。風が冷たい。

前後して歩いていた人々は、いつの間にか消えていた。

宿をとらねばならない。一泊して、明日の朝宮地という復員兵を訪ねるつもりである。行義がそうするように言った。

しかし、宿をとるということにも、気後れきおくがあった。ひとりで玄関に立ち、泊めて欲しいということにひるみがあった。粗略にあつかわれ、みじめな思いをするような気がした。

そんなことでどうするのか、と思う。自分が過剰におびえていることはわかっていた。それでいて、緊張をほぐせなかった。そんなことでこれから一人で福岡で暮せるのか、と幾度も自分を叱る気になった。

足だけが、勝手に上流に向っていた。

宮地の家をこのまま訪ねようか、とも思う。汽車をおりたときそんな気になったが、曖昧なまま、ここまできた。

歩く方向に宮地の家があるかどうかはわからない。山持ちの旧家と聞いていた。前方に山がある。しかし、山といえ、日田は四方が山であつた。

東に豊後富士、南に阿蘇、北に英彦山。そんなことを真紀は天草を発つ前に、たしかめている。もっとも目の前の山には、そんな標高はない。

小高い杉林であつた。暮れなずみ、木々の輪郭を失いかけていたが、整然とした人工林である。直立した細身の幹の林立は、疲れて心細い真紀の目にも美しく見えた。

なぜ足を止め、引き返さなかつたのかわからない。

この方向に、旅館がありそうには思えなかつた。だから、宮地の家をさがすつもりだったのかも知れない。しかし、誰にも尋ねずに、ただ足のむくまま、夕闇の道を歩くことは馬鹿氣ていた。そう思いながら、橋を渡つた。

杉林を背にして集落がある。その斜面の集落の麓まできて、ようやく真紀は立ち止つた。道は細くなり、のぼつて、林の闇に消えていた。

むろん、引き返すべきである。しかし、真紀は身内にうながすものがあつて、半ば無意識に、なにかを求めるように視野の中の数軒の家を見た。求めるものはなかつた。それがなにかはわからなかつたが、なにかにひきつけられるようにここまでできたという感覚があつた。ものを思いながら、目だけはなにかにひきつけられて、ここまでできた。しかし、貧しく小さな古家の数軒に、とりたてて真紀をひきつけるものはなかつた。

林だらうか、丈の高い杉林である。おそらく見かけより林齢のある奥深い林である。木と木の間

隔が、見慣れた林より狭いような気がする。美林であつた。しかし、自分が杉林にひきつけられたとは思えない。

苦笑してみた。

神経を立てすぎている。つまらぬことに、こだわっている。リュックの底を押しあげて、真紀は、いま渡つた橋を戻りはじめた。

いまごろ嘉恵は、表で遊ぶ周太郎を呼んでいるはずだと思う。

——しゅうほう、ごはんたい。

——しゅうほう、ごはんたい。

周太郎は見向きもしない。母ちゃんは怖い、嘉恵ねえさんは怖くない。

（しかし、これからは怒る、と嘉恵は言っていた。）

——しゅうほうッ！

おどろいて、周太郎は振り返る。素早く嘉恵の真意を見抜こうとする。

——ほんな事、おこつとるんかな？

対岸へ戻って、真紀はなに気なく振り返つた。そして、意味がわかつた。

屋敷である。

集落の奥に、瓦屋根の大きな家が見えた。手前の樹々ではつきりはしないが、長い塀にかこまれたその家は、蔵を持ち、ふたつの別棟があるかのように見える。「山持ちの旧家」ということが頭にあつたのである。近づきすぎて、手前の家にかくされていた。

いや——旧家というだけではない。

改めて見ると、その家には、鈍く暗く人の心をそそのめるものがあつた。

闇にうもれかけているせいかもしれない。建築の持つ直線の輪郭を、全体が失っているように思えた。そんなことはあり得ないが、間もなく、いたるところに細かな亀裂を生じて、音もなく、おびたらしい土埃だけを高々と立ちのぼらせて、崩れ去ってしまうのではないか。そんな奇妙な、不吉な印象が真紀を捉えたのである。

それが、宮地家であつた。

2

「ごめん下はりましたせ」

朽ちかけた門は閉まっていたが、通用口の木戸は、すこし力を入れると、きしんで開いた。

「ごめん下はりましたせ」

勝手口の腰板のある障子戸だけから、灯りが漏れている。夜目にも、庭は荒れ果てていた。

「ごめん下はりましたせ」

返事がなかった。

川べりで、この家を遠望し、歩きかけて自転車の若い女と会った。尋ねると、宮地さんはあの家だ、と女は屋敷に向って指をさした。

真紀は思わず女を見た。

おどろいたような真紀の顔に、女は曖昧に微笑して、その橋を渡っていくのです、と言った。礼を言つて、真紀は自転車が遠去かるのを見ていた。

あまりに、ひそかな予感どおりという気がした。なにかに導かれて、駅から宮地の家だけを目指してきたような思いであった。

なにかに？ いや、いまの真紀を導くとすれば、それは周一の他にはなかった。とすれば、宮地家の復員兵は、周一について語るに足る思い出を、用意しているはずである。むろん、それは幻想であつたが、そんな幻想を真紀は必要としていた。力を得て、真紀は小走りになった。橋を渡り、坂道をのぼつた。

「ごめん下はりませ」

あまり返事がないので、障子戸を開けた。

いろりに、空しく灯りが落ちている。

土間へ入り、リュックをおろした。とにかく留守ではない。

家の中は、意外なほど片づいて見えた。土間に、折れた枯柴が二枝三枝落ちている。しかし、あとはひんやりとよく掃かれていた。みがけば黒光りしそうな上り框が、鈍く生気を失っていたが、汚れてはいなかった。

「どなたか、おられんとでっしゅうか？」

物音ひとつなかった。

「お留守でっしゅうか？」

風の音がする。林のざわめきだけが聞えた。

「なんな？」

いきなり、背後で声がした。近づく気配がなく、突然の声であった。思わずぎくりとして振り返ると、鋭い目が真紀を見据えていた。老人である。

「あ。夜分、すんまッせん」

あどずさって、真紀は頭を下げた。

老人は動かなかった。

「なんな？」

とがめるような目で、真紀を見ていた。手に大きな酒徳利を提げている。しかし、酔っている様子にはなかった。

「うち、総一郎さんに、手紙ばさし上げた天草の村上ていうもんですばってん、あの、総一郎さんは、ご在宅でっしゅうか？」

「金ならなかぞ」

真紀の言葉をさえぎるように、老人は言った。

「は？」

老人は、目をそらした。そして、敷居をまたぐと、真紀に口をはさませまいとするように肩肘をはって、上り框をあがった。いろいろの傍へ腰を落す。それから、甲高い声で言った。

「金は一銭も出せんぞ」

むっとした。

「なんの事ですか？」

老人は、真紀の方へゆるく鋭い目を上げた。

「どこで知り合うた？」

「どこでて」なにかの誤解であることはわかったが、相手の高飛車な物言いに、腹が立った。「私は、まだ、一度もお目にかかった事はありません」

「うん？」

「手紙ばさし上げた村上で言うていただくとわかつとです」

老人は、徳利の栓をぬいた。

「村上でいいます。総一郎さんと軍隊で一緒だった村上周一の家内です。総一郎さんが復員ばなさつたて聞いて、主人の事、なんか伺えんかて、手紙ばさし上げたとです。ばってん、お返事ばいただけなので、突然で申し訳なかですが、ついであつたけん、伺うてみたとです」

老人は手を止めていた。真紀が口をつぐむと、大きな掌で徳利に栓をした。

「総一郎さんは、おられんどですか？」

「あがんなはり」

目を合わせずに、老人は言った。

「おられるとですか？」

「あがんなって言うてる」

真紀は短くためらったが、ここまで来た以上あがらずに帰る理由もなかった。振り返って、開いたままの障子戸を閉めた。

「失礼いたします」

切口上で言い、ブック靴を脱ぎ、いろりの傍まで遠慮せずに進んで、膝をついた。

「突然お邪魔して申し訳ありません」

「そうか——」

独り言のように、老人は呟いた。

「はい？」

「総一郎の女か、思ってた」

「そぎゃん事……」

「戦友か——」

「そうです。戦友の家内です。ああは、留守番のおじいさんですか？」

わかっていて聞いた。

父親は、はじめて薄く笑った。

「そぎゃん怒るな」

「総一郎さんは、おられるのですか？　おられんですか？」

「おる」

意外な気がした。老人を見たときから、なぜか会えぬものと決めかけていた。

「すんなら、呼んでいただけませんか」

「うむ……」

枯柴を折って、老人はいろりにくべた。立つ気配はなかった。真紀は自分を押えた。駅をおりたときの気後れが消えて、強い口調で老人に対している自分が、妙な気がした。

「お休みになったのですか？」

声を柔らげた。

「うむ」

「明日、改めて伺うたほうがよかなら、今日は失礼しますばってん……」

老人は黙って、燃える柴を見ていた。

「どぎやんでつしゅうか？」

「宿はどこね？」

「んにやあ、まだ決めておらんとです」

「そうか」

「駅からまっすぐ、ここさッよらして貰うたとです」

「そうか——」

老人は動かない。気持がわからなかった。

「どぎやんしますか？」